

ウスバカゲロウ (薄翅蜻蛉)



「Ant Lion」とか「Antlion fly」などと呼ばれている昆虫を知ってますか。和名では「ウスバカゲロウ」ですが、「薄い翅を持つカゲロウ」の意味です。このウスバカゲロウの幼虫がアリジゴク (アリ地獄) ですが、別名「スリバチムシ」と呼ばれたりします。蟻たちにとっては、ライオンのように恐ろしい存在の虫ということでしょう。

私の子どもの頃は近くの神社の社殿の雨のあたらない縁の下には必ず、アリジゴクがいたものです。アリジゴクは乾いた土を掘って、逆円錐型の巣を作り、その底に隠れて、小さな虫が、穴の中に転がり込んでくるのを、じっと待っています。ひとたび、その穴に足を滑らせた虫は、ほとんど助かりません。穴の斜面を登って脱出を企てても、アリジゴクは底から土を跳ね上げて、足場を滑りやすくします。そして、虫が再び落ちてきたところを、鎌のような二本のあごで取り押さえ、生き血を吸ってしまいます。彼は、生き血を吸い尽くしてしまふと、その弾力ある頭を使って、虫の亡骸を穴の外に放り出します。いわゆる、小さな吸血鬼といったところです。



アリジゴクの集落? (幼虫の大きさによって、穴の大きさも異なります)

かれらは、他の虫の血液を餌としているため、老廃物が少なく、成虫になるまでに一度も排便をしません。したがって、お尻の穴というものはありません。そして成虫になると、幼虫期にたまった糞を一気に出すといわれています。これを胎便というそうですが、人間の赤ん坊が生まれて初めて出す便と同じ名前が付けられています。人間でも、胎内にいるときは脱糞せず、生まれてからその時の宿便を出すからです。

「金送れ、頼む」が、「金をくれた、飲む」に変わったり、「昼、留守、晩に来い」が、「昼、留守番に来い」という話に変わったという電文の読み違いによる珍談は沢山ありますが、次の話は深刻です。

明治10年に、時の政府が鹿児島にある西郷隆盛の私学校を視察中の2人の少警部あてに電文を打ちました。その意味は、帰国が遅いので「早く視察を終えて帰れ」だったそうですが、西郷側は「早く刺殺を終えて帰れ」と読み、中央政府への叛意を固めてしまったと言われています。

昆虫の世界にも似たような話があります。

どくどるマンボーこと北杜夫氏の「どくどるマンボー昆虫記」にも、ウスバカゲロウの愉快的話がでできます。

氏が小さい頃の話として「若い頃からその名前だけは知っていた。しかし、ウスバカゲロウが「薄翅蜻蛉」であるとはつゆ知らなかった。てっきり「薄馬鹿下郎」だと思いこんでいた。そいつはのろのろと飛び巡り、障子にぶつかってばかりいたからだ。今となっても、「薄馬鹿下郎」の方がどうしても私にはぴったりする」と。